

たより

『美紗の会』 ニュース

第十三号

平成六年八月二十日

発行者
『美紗の会』事務局

☎ 03-3441-2726

第十二回

『ゆかたざらい』

開かれる

七月二十三日於白金福祉会館

七月二十三日、汗滴る猛暑の中、白金福祉会館で第十二回美紗の会『ゆかたざらい』が催された。大雪に見舞われ散々な目に遭った『おひきぞめ』の後だけに、今回も台風七号接近の予報に気を採んだ者も多かったが、夏の迷走台風も会員の氣勢に押されたのか東京を避け、三十名余の同好の士は予定通り日頃自慢の喉と腕を競い合った。

開演一時間前の十二時頃から熱心な岡崎、小高、本郷諸氏などが、近所の増田さん母嫁、会主のお母さん、妹さん、菊音さんなどに混って準備開始。もつとも男共は手伝っているのか邪魔しているの

せる。師匠のお母さんのである。お稽古する時間がなくて寝床の中で二、三度唄っただけ」など言いながら仲々どうして、唄を自分のものとして楽しみながら唄っている。本場に練習なしでの舞台ならば、何時も練習なしのぶっつけ本番だと言いつつ、必ず横浜から駆け付けてくれる大西さんと良い勝負。

何時か田中さんが「邦楽を本場に楽しむには、自分で三味線を弾かなければ駄目だ」と言っていたが、美紗の会でも唄と糸の両方をこなす人は本場に羨ましく思う。そんな中で増田姉嫁は仲良く二人ともが両方をこなす垂涎の的。しかもその上真知子さんは閉崎ひで女門下に入り先日国立劇場で舞台を踏んだと言う才女。国立劇場の舞台を観た会員は異口同音に、「可愛らしかった」とその艶やかさを褒めそやしていた。

嘉本氏が水口さんの糸にびったりと息を合わせながら『深川節』を唄えば、岡崎氏は弾き唄いで絶妙の『奴っこさん』を披露。水口さんは糸も良いが唄も渋く堂々たるもの。安心して聴ける。

飛田さんの唄は山根さんの糸で「ほれて通う」。流石に舞踊の花柳千寿文師だけあって玄人の芸。一方山根さんは請われて千葉の方の診療所に移ったと司会の康枝さんから紹介があったが、弾いても唄っても何時も笑顔絶やさない人だ。唄は『夕暮れ』。川辺さんは前座の『淀の川瀬』に続いて本舞台では『文月』と『夏の暑さ』を披露。恵比寿教室で唯一人残った川辺さんは女性経営者として多忙な日々を送っているのにも拘らず唄には益々味が出る。

会主秋の公演

予定決る

会主の九月以降の演奏スケジュールが決った。益々多彩になる活動。皆の熱心な後援が期待される。

- * 9月30日
日立市アークプラザにおいて同市の財界人が集まり「西松布唄を囲む会」を開く
- * 10月5日

「清麗会」(国立劇場小劇場)

場・15時・17時
『反魂香』(舞・閑崎清女)
『世界』(舞・閑崎ひで女)
に地方として出演

* 10月28日・30日
「日本文化デザイン会議」
94福岡

福岡ベイサイドプレイスにおいて日本文化デザインフォーラム主催のボディウエザークッションに、編集工学研

究所・松岡正剛氏と共に出演

* 11月5日
「いのちの集い」(ラフォーレミュージアム赤坂)
日本アジアの伝統芸能の可能性を考えるアーティストの祭りに大鼓の大倉正之助、舞踏の玉野黄市氏と共演

* 11月19日
「花柳漣一の会」(国立劇場小劇場)
(二頁下段へ)

ンビで欠かせない存在になりつつあるようだ。

今回の赤坂組の長唄は『岸の柳』、赤坂組の長唄もいよいよ定着してきたようだ。美紗の会の呼び物、もう一つの長唄は安倉、小高氏の唄、会主と岡崎、田中氏の三味線で『都鳥』。こちらは堂々の唄いぶり。

美女々々コンビの藤井さんは相方の松岡さんが抜けて淋しそう。しかし一端演奏を始めるると立派なもの。唄にも糸にも円熟味加わる。司会からは藤井さんも銀座にお店を持つたとの紹介。会員にとっては心強い限りだ。今回から出演の安倉、滝沢、竹沢氏はそれぞれ唄の方はベテラン。皆さん一様に渋い喉を披露してくれる。

本郷、板野、嘉本の赤坂組の諸氏のとりを取って佐久間会長は『辰己の左様』、『軒つ

ばめ』を会主と増田さんの伴奏で披露。毎度のことながら上手い唄い方。会衆の間からは「さすが会長」との声も。

そしておとりは恒例の会主の弾き唄と、それに合わせたの飛田さんこと花柳千寿文師の踊り。今回の演目は『あじさい』。両師の至芸に一同暑さと刻を忘れる。

日頃の練習の総決算、四時間余にわたる舞台の後で皆を待っているのは恒例の懇親会。今回は丁度会主の誕生日と日が合っていたやが上にも盛り上がる。会主の家族総出の準備。増田さん始め近隣会員の力添えと、篤志会員からの寄付で今回は盛り沢山のご馳走と飲み物。それにも増して会主を喜ばせたのは岡崎さんの隠し芸「かっぱれ」の披露をはじめ皆から寄せられるお祝いの言葉と談笑。暑い夜は熱く燃えていった。

投稿

小唄ちよつといゝ話

穴じゅう六

小唄や端唄の稽古を楽しむように... 小唄的というか、もうひとつ別のジャンルが自分にはあるというゆとりが...

芸妓小芳が来る。その度にお舊の心琴は激しくゆれる。彼女に恐れと不安とそして親密感を与えるこれらの人物の登場が、勧進帳の三味線のリズムと見事に調和している...

線が、アリヤナ、コリヤナ そこりて さんさん毒ついで 「上総無宿の入墨新三だ」と、意気がった新三だが、最後には老練さで一枚上手の長兵衛にやりこめられ...

テープ発売のお知らせ

九月、いよいよ会員待望の会主の演奏を録音したカセットテープが自費発売されることになった。テープの発売は以前からの会主の夢でもあり誠に嬉しいことである...

「ゆき」 「黒髪」 「名護屋帯」 「柳やなぎ」 を取め、さらに美紗の会では御馴染みのアマースト大学のジョン・ソルト教授が英語と日本語の両方で解説を加えているという逸品である...

『会員のたより』

* すでに二児の母となつた佐々田和代さんが会主の誕生日をお祝いしながら、皆さんに会うのを楽しみに愛児と共に花束を持って白金福祉会館に来てくれたのはよかったです...

* 会主は八月二十二日から九月十日までオーストリア・ハンガリー・イタリーに外遊します。また多くの人々や文化に触れますます芸の深みが増すことでしょう。

「黒髪」「山姥」「越後獅子」の地方出演 * 12月5日 「橘の会」(水道橋能楽堂) 「反魂香」(舞・閑崎ひで女)に地方出演

『編集雑記』

* 青森のねぶた祭を見た。 * 桓武天皇の時代、蝦夷の反乱を征伐すべく坂上田村麻呂は追討軍を進め、頭目、悪路王を追う。 * 急に攻め込まれた悪路王は平内山に逃げ込むが、一計を案じた田村麻呂は大きな灯笼を作り、明々と灯を点し、山裾で笛や太鼓で囃し立てる...

* その大灯笼がねぶたの起源といわれ、中に明かりを点した大きな山車が練り歩くと、山車は勇猛な武者であったり、力士であったり、時には漫画の主人公も出てくる。 * 祭の庄巻は大きな人形灯笼ではあるが、津軽人を熱くさせるのはハネトと呼ばれ、自分の好きな山車の回りを踊りながら練り歩く人々である。 * 暑い夏の夜を夢中で踊り狂う人々を見ながら、なぜかふと静けさの中に凄く迫力を感じさせた国立劇場での「華の会」の地唄舞のことを思っていた。